



ドクター・ハザマの

# バイタルサイン塾 24

## 薬剤師と血液検査データ

ファルメディコ株式会社  
大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座  
医師・医学博士 狭間 研至

### 薬剤師が日常的に血液検査データに接する時代はすぐそこまで来ている

薬剤師を対象にした血液検査データの読み方や原理についての解説書は、昔からいくつも出版されています。中には、何度も改訂を重ねたポピュラーなものもあります。病院では血液検査のデータをカルテで確認することが可能でしたし、最近ではカルテの電子化によって、よりデータにアクセスしやすくなっていますが、薬局の薬剤師にとっては、患者にデータを尋ねるほかは、ほとんどつてがありませんでした。病院勤務を経て薬局に勤務された薬剤師の中には、患者の血液検査データにアクセスできないことに、驚きと不満を感じておられるケースも少なくないようです。

昨今、電子カルテのネットワーク化が進んでおり、薬局で医療機関のカルテが閲覧できるというケースも出てきています。また、患者の同意を得て処方せんの余白に血液検査データを記録する大学病院の事例など、IT化を必要としない情報開示の取り組みが見られるようになってきました。

今後、患者の情報は患者自身が持つという PHR (Personal Health Record) や、IT を活用した EHR (Electronic Health Record) への流れは加速していくと考えられ、薬剤師が病院・薬局を問わず血液検査データに日常的に接する時代はすぐそこまで来ていると思います。

### 血液検査データを読めるようになる 2つのポイントとは

血液検査のデータを読めるようになるということは、医療従事者にとって1つのステップになると思います。

私も医学生時代に、実習で担当した患者さんの血液検査データをノートに写しながら、全く理解できずに愕然としたことがありました。そこに悩んでいる薬剤師もいらっしゃるかも知れません。

私もいろいろな本を読んだり講義を聴いたりしましたが、一番ためになったのは、血液検査データを書き写すことでした。

私が医師になった平成7年当時は、院内のオーダリングシステムは稼働していましたが、カルテは紙でした。プリントアウトしたものをカルテに貼り付けることはありましたが、指導医からは「紙に書き写せ」と言われました。正直なところ、最初は「何でそんなことを」といぶかったのですが、写しているうちに手と頭が覚えていくことに気がつきました。記憶のメカニズムからいっても、いくつもの感覚を同時に使うことが大切なことだそうなので、見るだけでなく、書くという作業は重要なのだらうと思います。

あと、もう1つポイントがあります。それは、時系列に並べてサマリーを書いてみるということです。私が入局した当時の教授（松田暉先生：現兵庫医療大学学長）は、教授回診のときにカルテを見て、よく「サマリー！」と研修医におっしゃっていました。カルテの中に、1週間のできごとをサマリーして書いておきなさい、ということでした。

患者の状態を報告するためには、血液検査のデータは欠かせませんが、現在の病態の中でどの項目が重要で、その数値が治療経過のなかでどのように推移しているのかを一目で分かるようにまとめることをしているのです。当初は、「検査データの欄を見れば分かることなのに…」と思うこともなかったわけではないのですが、やっているうちに、ふと血液検査データが読める自分に気がつきました。